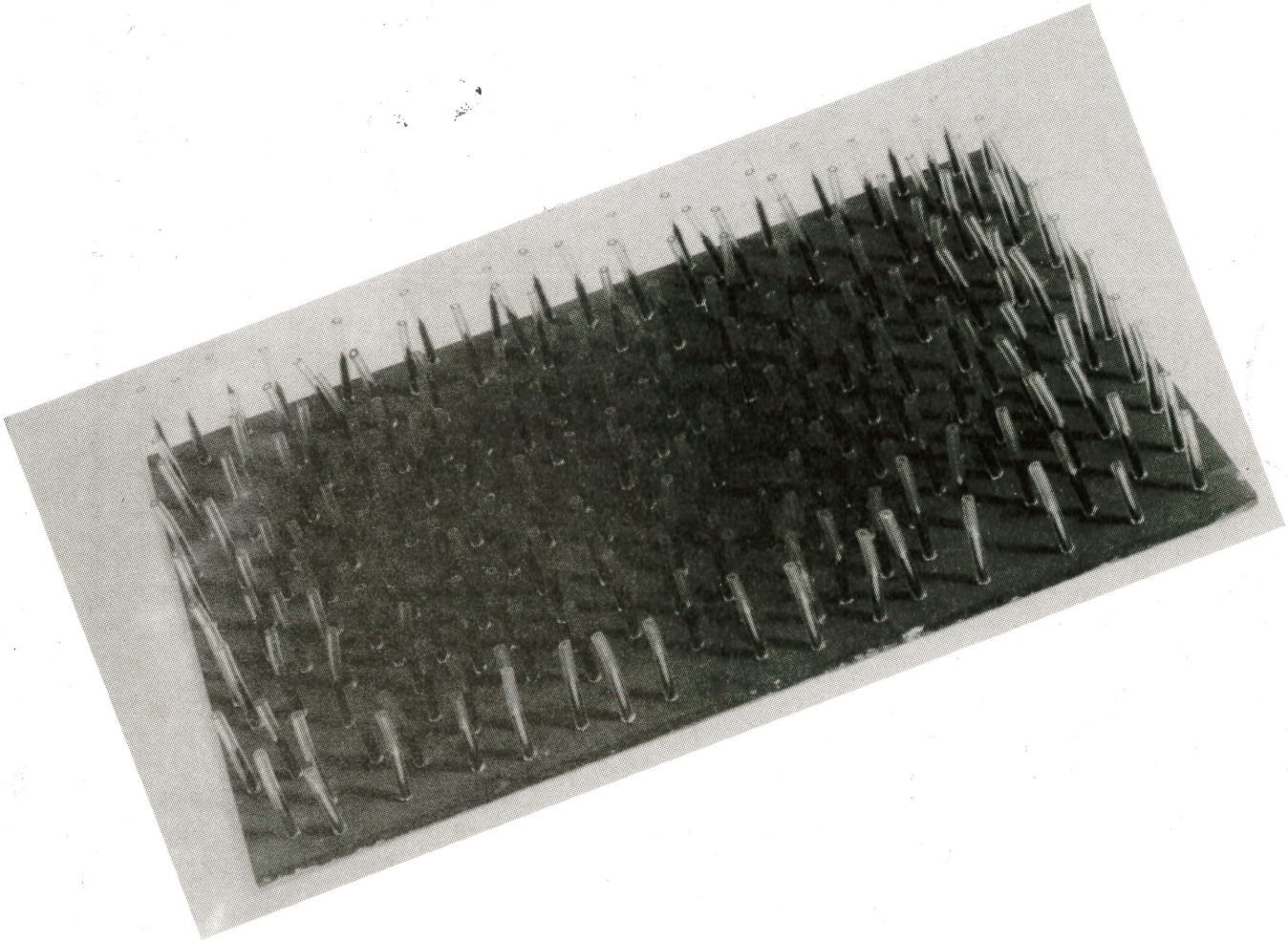
1985年11月15日発行　毎月1回15日発行　1974年1月8日第3種郵便物認可　前　衛　No.306

「社会主義理論フォーラム」を終えて

・インタビュー

「四つの現代化」のもとで激変する中国



前衛 11月号 No.306

ブラックホール

警察がまた余計なことをはじめた。「いじめ対策室」なるものを設置し、こどもの世界にまで介入しはじめたのである▼たしかに学校での「いじめ」問題は深刻だ。だがそれは、国家権力が力で抑えつけてどうなるといった性質のものではない。かえって事態を悪化させるだけだ▼事実、「いじめ対策に本格的に取組む」との宣言以降、警察はやつぎばやに**実力行使**に出た。一五にもならない女の子をはじめ、つぎつぎと**しょっぴき**だしたのだ。「逮捕」といわないのは刑事責任を問えないローティーンが相手だからだ。「補導」という名目で年端もいかないこどもたちがブタ箱入りさせられていく▼こうした警察の仕打ちに怒りを禁じえないのは、行為それ自体の非人道性もさることながら、「あらゆる機会をつうじて権限を拡大し市民社会に浸透していく」というかれらの戦略の、それが具体化の一環だからだ▼以前この欄でとりあげた「新風営法」もそうであったし、最近話題になった「未成年にたいする淫行判決」もその流れの中にある▼後者についていえば、判決を下したのは裁判所だし、そのもとになる条例を決めたのは地方自治体だ。でも、「淫行」の事実をキャッチしたり摘発する機能をもっているのは警察だけである。実際、事実上死文化していた「淫行禁止条例」が突如息を吹き返したという「奇跡」は、警察権力の介在をぬきには理解不能の現象といわざるをえない▼在日外国人の指紋押捺問題にも、多分にそうした背景が感じられる。法律なんてものは、けっきょくのところ現実に執行する主体の意向に左右されるものなのだ▼『行政機構の簡素化』が呼号される一方で、自衛隊とともに治安警察だけが「聖域」あつかいされている。後藤田を筆頭に、権力の中枢を担う警察官僚OBも多い。次の選挙を狙って三人の「新OB」が事前運動を展開中だ。警察組織を使ったそのやり口の、あまりの露骨さがしばしばマスコミにとりあげられている▼**警察の政治化**と**政治の警察化**。現在進行している事態を一言で表現すればこうなる▼かれらは自分の**失態**をもその権限強化の口実にする。管制塔が占拠されれば成田一帯を戒厳令下におく、全共闘運動が高揚すれば大学臨時措置法案を手に入れる、といったぐあいに▼先日の中核派の同時多発ゲリラもそういうふうに利用されるのは目に見えている。「やらせ」という一部の判断には組みしないまでも、結果としてそうなるのは明らかだ。▼一つの組織の都合によるテロほどハタ迷惑なものはない。

本号の誌面

ブラック・ホール……2
「社会主義理論フォーラム」を終えて……3
東京高裁ではじまる
東海第2原発阻止訴訟……5
インタビュー
「四つの現代化」のもとで激変する中国……6
現代を超える透視力を養うために……10
スクスクログハウス　イン　中谷津……11
〝演劇が面白い〟―地人会公演「教員室」……13
哲学問答Ⅱ　第六回　アルチュセール再論
理論の応用がおもしろい……14
表紙のことば……15

表紙　空間工房

「社会主義理論フォーラム」を終えて

すべてを覆おうとしてはいけない外部の声に耳を傾けなければならない

さる十一月二日、三日、四日の三日間、東京勤労福祉会館および東大本郷で、「社会主義理論フォーラム」が開催された。総参加者は九三〇名にのぼり、この種の会合としては近年まれにみる盛況であったといえよう。

「フォーラム」(広場という意味)の初日は八丁堀の勤労福祉会館大ホールで開かれ、井汲卓一氏以下二〇名による多様な問題提起を中心に議事がすすめられた。

二日目は本郷に会場をうつし、労働、女性をはじめ十個の分科会がもたれた。事前の準備、参加者の関心を反映して分科会ごとにバラつきはみられたが、おしなべて活発な議論が展開されたといえよう。

三日目はふたたび勤福大ホールにもどり、十分科会の座長報告をもとに総括討論がおこなわれたのち、武藤一羊氏をヘッドとする「まとめ起草委員会」から「まとめ」が提案され、全体の了承を得た。そして前田俊彦氏による閉会のあいさつをもって三日間の討論を終えたのである。

社会主義はたしかに出しゃばりたがる

本誌前号で設楽清嗣氏が――社会主義はあらゆる概念を統括したがるものだ。「つまり社会主義の旗の下にフェミニズムやエコロジーをやれ」という優越性の論理が出てくるから「社会主義・フェミニズム・エコロジーの連合」という関係など生じようがない――として、フォーラムの試みそのものを批判していた。

この指摘は一面の真理をついている。私自身は「大勢集まって議論するのは悪くない」くらいのいい加減な位置づけで事務局を引受けたのだが、「大勢集まることは、かならずしもそれ自身で民主的な討論の深まりを保証するものではない」ということをなんどか思い知らされた。

たとえば本年三月神奈川で開かれた合宿でのことである。「ルドルフ・バーロをよんで話を聞こう」という提案がなされたさい、「それはどういう人ですか」という質問が出てきた。声の主は八〇才くらいの爺さんである。聞けば「元コミンテルン日本支部代表」とかいうえらい人なのだという。

「東ドイツの反体制活動家で現在は西ドイツに亡命して緑の党の設立にも参加した」と提案者のいいだももさんが説明したとたん、「そういう人は良くないんじゃないですか」ときた。よくよく話を聞いて驚いた。この御人はソ連、東欧などの「現存社会主義」を全面的に肯定する立場なのだ。「かりにまずいところがあるにしても、それらはすべて客観的条件の困難からくるもの」という恐しく御都合主義的な論法をもって。

既存の理論にも「社会主義国」にもなんの疑問を感じていない人たちが、フォーラムに参加してなにをしようというのだろう。ようするに、「マルクス主義からの逸脱」をいちいちチェックしてまわるという、おせっかい以外のなにものでもない。創造的な議論などはじめから期待しようがないのだ。

事実、この山本某という御老体の対応は、終始これ以上でも以下でもなかった。討論の話の腰を折ってばかりいるのである。「枯木も山のわざわい」と思わず皮肉をもらし、武藤一羊氏からたしなめられた。そうなのだ。「排除の論理」を否定するフォーラムの立場からすれば、これも耐えるべき試練なのだ。

「老害」だけではない。「党派公害」も問題になった。合宿二日目に「現存社会主義」を「国家資本主義」と規定するか「労働者国家」等と規定するかで論争になった。それぞれがそれぞれの従来の主張を開陳し、決まり文句が虚しく飛びかうという事態になってしまった。ほかの人たちはみなウンザリしてるのになまじ党派を背負っているものだから、おたがいに一歩も引けないで言い争っている。しかもそのへんは、まわりにみえみえなのである。

内攻し自閉する党派

「それみたことか。」わが設楽先輩ならずともそういうにちがいない。ところが事態は思いがけない方向に進展した。

まず第一に、論争に加わらなかった二、三の党派の評判がかえってあがるという、奇妙な結果が生まれた。「自派の主張を機会のあるごとに宣伝する」という原則への忠実さが裏目に出てしまったのである。

つづいて第二に、党派がエコロジーやフェミニズムとの接触を敬遠しはじめた。自分らの社会主義論を展開すればするほど、聴衆から浮いてしまう。そのぶんだけエコロジーの側の人気が高まる。かといって、かれらの問題提起に答えるだけの理論も蓄積もない。ここ十年ほど新左翼各派の「理論」が実践的かつ大衆的に験(ため)される機会をもたず、つまるところ内輪だけの意志統一の符諜にとどまってきたことの反映である、といったら酷であろうか。

いずれにしろ、「社会主義が他の潮流を支配する」という予測ははずれた。いや、あまりに「赤」が消極的なのでエコロジーの方がぎゃくに心配し、八月十七日に「赤と緑の対決

ないし対話」という場まで設けてくれたにもかかわらず、ほとんどの党派は多忙を理由に欠席した。かといって他の機会にエコロジーやフェミニズムの話を聞きにいくというのでもない。関曠野氏をして「この対決は赤の不戦敗に終った」といわしめるていたらくであったのだ。

とはいえ、それで問題が解決したわけではけっしてない。党派は内向し自閉的になった。マルクス主義の理論家やマルクス経済学者にしても大同小異であった。つまり「赤」とエコロジーやフェミニズムの違いのつき合わせが不十分なまま、十一月の本番を迎えることになってしまったのである。

そのため、フォーラム当日の発言で「フェミニズムはわからない」と広言する主催者側の人間が現われたり、エコロジーにたいする初歩的知識もないまま見当はずれの批判をくり返して失笑をかう党派が続出するありさまとなった。

おたがいの価値基準を相対化すること

私自身が担当した社会主義分科会も、他の分科会同様「プレ（準備）フォーラム」として計十回研究会やシンポジウムを開いた。

その過程でわかったことは、「現存社会主義」の実態を実証的に明らかにすればするだけ、社会主義というものの否定的な側面が浮き彫りにされてくるという事実であった。党派の意気が上らないのは、そのへんにも原因があるのかもしれない。

ただそのなかで、岩田昌征氏の報告は注目をひいた。つまり氏はソ連型の「社会主義」とユーゴ型の自主管理体制、それに資本主義の三者を、「それぞれの回路で産業化を実現する同位対立物」と規定し、その三極構造をもとに現代世界を分析する方法を提唱したのである。そして氏によれば、「われわれのめざすべき社会は、この三者をともに止揚するものとしてはじめて構想することができる」というのである。これは従来、「資本主義か社会主義か」という二者択一で問題をとらえがちであったのにたいし、両者をともに相対化してとらえる画期的な方法とはいえないだろうか。

こうした観点からすれば、①一方の体制の価値基準をそのまま他にあてはめて論じてはならない（たとえば資本主義の効率原理をもって「社会主義は非能率だからよくない」と即断すること）②市場原理の導入によって現存社会主義の矛盾が解消するとする折衷主義も無理がある、③ましてや「資本主義が良くないからいろいろ欠点はあっても最終的には現存社会主義を擁護すべきだ」などという主張は成り立たない、等々ということになる。

しかしながら経済人類学の方法を援用した氏の主張の新しさは、参加者に十分理解されたとはいいにくい。その意味で今後に課題を残したといえるだろう。

ネットワークの深層構造

おなじようなものとして山崎カヲル氏が紹介した「ポスト構造主義」の方法がある。

私自身つい最近まで、これらいわゆる「現代思想」を、たんなる輸入思想としてしか見ていなかった。この報告を読んでいる人々のほとんどもそうであろう。だから「浅田彰現象」などに無用な反発を示したりするのだと思う。

ところがどっこい、これらはたんなる「はやり思想」ではない。「現代」というきわめて錯綜した社会を分析するのに、非常に有効な方法論であり、またそこで新しい人間関係をとりむすんでいくのに役立つ運動論、組織論でもあるのだ。

一言でこの方法を規定するのはむずかしいが、「すべてを覆うとはしない」という自制的な学問の態度にすべてがあらわれているといえるような気がする。たとえばこれまで、マルクス主義者は「自然弁証法」などというあやしげな議論をデッチあげ、「宇宙のすみずみまで弁証法の論理が支配している」と強弁しつづけてきた。あるいは「生産力と生産関係の弁証法＝唯物史観」で全歴史を説明できるかのような錯覚におちいってきた。このような姿勢を改め、マルクス主義、とくに経済学の適用対象を資本主義的商品経済に限定する必要がある。いいかえれば自然科学には自然科学の、構造主義には構造主義の、それぞれに固有な論理と対象領域があることを認めるべきだということである。

資本主義は「全人類史を総括する」特殊な性質をもった一時代である。だからこのようにマルクス主義の役割を限定しても、社会主義、共産主義を展望するのに不都合はない。いや、このような反省をとおしてのみ、社会主義をいきいきと、そして具体的に構想することができるのではあるまいか。

それだけではない。右のような立場は、運動においても、「一つの思想や一つの党派で全体を覆わない」という態度に結びつく。多様な思想、多様な主張、多様な個性の存在を前提にし、そのゆるやかな関係づけに発展の可能性を見出そうとするわけである。個々の運動にせっかちに政治をもちこんだりしない、過去のいきがかりに拘泥しない、などなど、そのほかにもさまざまな実践的態度を引き出すことができる。つまり非常に可能性をふくんだ方法論なのである。

一つひとつの運動はかならずしも「反体制」をかかげていず、あるいは右も左も区別がはっきりしないものであるかもしれない。だがそれらをおたがいに関係づけたとき、現状変革への強烈な志向性が浮かび出てくる、そうした戦略を構想することが可能となってくる。

フォーラムはとりあえず今回かぎりのものとされている。あとは報告集の発行など残務処理が残っているだけだ。そして、フォーラムの残したものを「成果」として刈り取るためには、右に紹介したような問題意識を発展させる以外にないであろう。

坂内仁（フォーラム事務局）

現代を超える透視力を養うために

―現代思想講座開催にむけて―

現代思想ブームといえるような現象がおこっている。浅田彰の「構造と力」あたりからブームはひきおこされたように見えるが、それ以前も「軽い」思想への関心は存在していた。村松友視南伸坊、椎名誠あたりから藤原新也、岸田秀、栗本慎一郎まで、「思想的」なものを軽くエッセー風に読ませるムードはただよっていた。

閉塞の時代に哲学が流行するのはいつの時代にも共通する。

昭和の初期、大戦を前にして、やはり哲学に関心のたかまった時代があったという。中村真一郎等のマチネ・ポエティクのグループが戦後、この哲学ブームに対する厳しい批判を行った。

だが既成の価値構造に亀裂が入り、新しい価値構造が登場しない時代に方法論としての哲学が一定の力をもつのは当然のことである。しかも現代は中世末期にも比肩しうる時代としての資本制社会の末期である。つまり近代の終焉期としての現代なのである。

この近代を貫いて数理と実証によって成立してきた「科学」的認識と物質文明というものが大きく動揺している。そうした価値構造の表裏ともいえる資本主義とマルクス主義。この近代史を支えてきた二つの価値体系のそれぞれに、まさに亀裂が生じているのである。

「確か」なものは何か。この問に対する回答は、以前は自明なものであった。しかしこの四半世紀、この自明なもの、つまり数理と物質の外側からの崩壊がひろがっているのである。

物質の代償でもあるかのように、自然や精神の崩壊がすすみ、この分野を計量的に測定し手を加えることの限界がますます明らかなものとなってきているのである。

ここへきてわれわれは、この近代を支えてきた原理と方法論への疑問に直面せざるをえないのである。この道だけがわれわれにとっての選択肢であったのだろうか。またその中で、不確定であるということで切り捨てられてきた分野に、別の価値構造はひそんではいなかったのだろうか。

事実、レヴィ・ストロースは「野性の思考」の中に、まったく異なった価値構造を発見した。

あるいは科学的思考の最先端の中にそのような価値構造を反転させるような根本問題が明示されつつある。

今日の哲学ブームは、こうした実情の中で生み出されているものではないだろうか。だとすればわれわれもまたこうした作業を横目でながめているわけにはいかない。それどころか、近代に導き出された現代という時代に対峙するためには、再度、本当にラジカルな透視力を獲得することは不可欠である。

すでに本誌ではこの一年をつうじてその下準備を重ねてきている。そして今回いよいよ講座が出発することになった。有志の参加を乞う！

連絡先　現代企画03・293・8564

現代思想講座

Ⅰ哲学・思想史を鳥観する―ギリシャから現代フランスまで―　2回

Ⅱ現代思想を規定する３つの思想潮流
―マルクス主義・非合理主義哲学・現象学　1回

Ⅲ構造主義とその成立根拠
―マルクス主義・実存主義と構造主義―　2回

Ⅳポスト構造主義とは何か
―ドゥルーズ＝ガタリを中心に―　1回

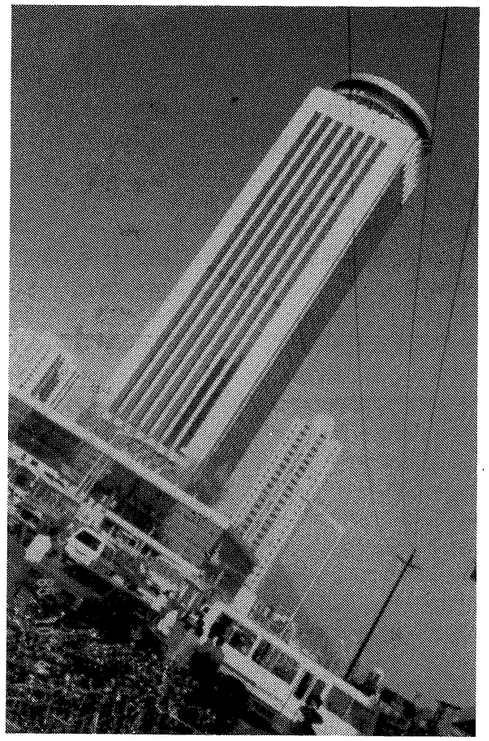
（来春２月より隔週全６回）

思想講座プロジェクト

インタビュー
「四つの現代化」のもとで激変する中国
—法政大学教授川上忠雄氏に聞く—

——今回は、さきごろ中国を訪問し「現代化政策」を推進中の現地を視察してきた法政大学教授の川上忠雄氏にお話をうかがった。なおまとめは当編集委員会の責任で行なった。

『前衛』編集委員会



現代化の象徴？（深圳の摩天楼）

すでに過去のできごとになってしまった文革

まず、どのような目的でどういう人たちと訪中したのですか。

◈「日中友好学際訪中団」が正式名称で、団長は東大の宇沢弘文さん。清水慎三さんが前から独自に中国とのパイプをもっていたんですが、その関連で独自の日中友好を築いていきたいということで訪中が計画されたわけです。私自身は文革否定後の「四つの現代化の実態」を確かめたいということでそれに加わった。メンバーは清水さんと星野芳郎氏が顧問、東大の兵藤釗氏が秘書長で総勢一三人。鶴見良行、田口富久治の両氏もふくまれてます。

最初はもっと多勢行く予定だったんだが、例の日航機事故の影響で減った。（笑）

どんなところを訪問したんですか。

◈九月二十日から十月六日までの日程で、北京—大連—瀋陽—広州—深圳特別区をまわって香港に出ました。工場と農村の元人民公社を見学、党—国家の幹部から話を聞いたり大学教授とも交流しました。

全体をとおしての印象は？

◈文革批判は話の枕にかならず出てくるが、すでに過去のできごと扱いされている感じ。党—国家体制は固まっており、当分このままでいくのじゃないか。ちょうど共産党の全国代表者会議が開かれていたが、特徴は大幅な人事の若返りで、内容としては八四年十月の第一二期三中総の経済改革決議の推進といっていいだろう。

いま自分もゆっくり考えてみたいこともあるので、結論を出すというよりも生々しい実態のレポートをし、それにコメントをつけるというかたちで話していきたい。

農村の変化（寧官の例）—個人請負制で激変

農村はどうなってました？

◈七八年末の第一期三中総で鄧小平体制は確立したが、農村ではその時から一足先に改革がすすめられていた。つまり現在すでに七年前後の実績がつまれているということです。

瀋陽近郊の寧官という村をみせてもらいましたが、そこは人口三三〇〇人、戸数九〇一戸、一七五〇人の労働力人口で、以前の生産大隊の規模にあたる。人民公社は実質的に解体されたのに、寧官工業公司と農村委員会がおなじ建物に同居してた。ま、それが「政経分離」の現在における表現じゃないのか。

各地に建設された水路橋

何を作ってるんですか。

◈米作が主。それに若干の野菜と養豚、養魚養鶏。ここではすでに「四人組」失脚の七六年には「生産リンク責任制」が採用されていた。七八年には「グループ請負制」（組に分けて請負わせる）が、八五年には「生産量連動請負制」（個人請負）が導入された。それは二七戸の農家に全水田を請負わせるというもので、一戸あたりの水田面積は二百ムー（一ムーは〇・〇七ヘクタール）から五百ムーにたっする。多いところでは八～十人の労働者を雇用しており、中には村外からの雇用もある。ただ、雇用期間が六～七か月と短いのが特徴だ。

どうやって米作専業者を決めたんですか。

◈そこは団員全員の関心があったところですが、聞いた相手によって答が微妙にちがう。家庭訪問で聞くと入札制というのと話し合いというのとに分かれた。いずれも半分真実なのではないか。とにかく農業やりたくてもやれない人が出たことはたしかです。

雇用労働者、家族労働力もふくめて百人ていどが米作に従事している。もともと近郊農村で農業が主じゃなかったところらしいが、それでも排出労働力は出た。そのうち八〇戸ほどが副業の専業戸になり村の小工業に千百人が吸収された。あと三百人ほどが輸送や旅館などに向かったようだ。

早急に問われざるをえない新しい連合の形態

小工業の実態は？

◈①「集団所有—個人請負」というのがまずある。元の人民公社企業です。税金をおさめるだけで経営は自由。ただし生産目標が達成できなければ経営者の「首」の問題になる。つぎが②「個人所有—連合経営」。機械修理などの技術をもった連中が二、三人集まってやるのが多い。そして最後に③「個人所有—個人経営」というのがある。

①が一番大きい。たとえば二三〇人のレンガ工場というのがあり、それが最大だ。セメント工場もある。なにしろ中国はいま空前の建設ブームだから。ほかの業種としては機械修理や部品などの都市工業の下請的なものが目立つ。目ぬきには露店がならび農産物などを売っており活気がある。

賃金は都市より高く百—三百元くらい。農業生産も上がり、商工業も爆発的に増加している。

一番問題に思ったのは、新しい連合のあり方が早急に問われざるをえなくなるということ。たとえば現在東北のほうまで米作が広がっている。これは予備知識とはちがい驚きだった。というのも、人民公社時代に水路橋を建設したり、電化して水上げモーターを設置したりした結果です。こうした、いわば協同労働による基盤整備の成果を個人請負で刈り取っているのが現在だともいえるわけで、それが一段落したあとのつぎの基盤整備をどうやってやるかが、かならず問題にならざるをえない。

ほかに問題に思ったことは？

◈ある中国の学者が「集団所有だから社会主義だというだけではすまない。雇用すれば搾取の契機が生まれる」といった。そしたらその夜党の地区幹部がその発言を否定に宿舎までやってきた。それでわれわれの何人かと深夜まで激論になった。

なにをめぐってですか。

◈こちらは「おなじ仲間どうしが雇う側と雇われる側に分かれるのはおかしい」と主張しそれにたいして党幹部は「農業のエキスパートがかつての仲間の子供をしばらく雇っているのであって、階級分化とはちがう」と答えてた。ただ、新しい「連合」の必要性は認めてた。同行した農業専門家の話では、ほかの農村でもそうで、かれらは今日本の農協に非常な関心をもっているという。

請負地の土地所有はどうなるんですか。

◈いちおう五年という期限つきの請負なんだけど、「満期になったら割換するのか、またできるのか」という問には、「五年たってみなければわからない」というのが正直なところのようです。

ただ、「土を離れても郷を離れず」というスローガンは注目に値する。農業をやめても在地の「郷鎮企業」で吸収しようというものだ。ほかの第三世界では流民化して都市に集中す

るのがふつうだが、その点できわめて野心的な実験といえましょう。

「公有制にもとづく計画的商品経済」を展望

都市と工業の方はどうでしょうか？

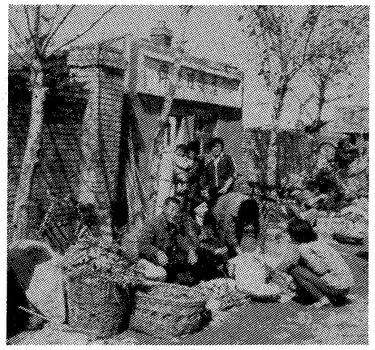
◈着いた時からの鮮明な印象は、中国があとにも先にもない大住宅建設ブームのただなかにあるということ、それに「四つの現代化」のもとでの社会的再生産の緊張が道路交通の面に集中的に出ているな、ということでした。三年前にきた時には自転車天国で、車は無闇に警笛をならすなというスローガンがかかっていて、これはいいなと感心したのに、今回は、まだ多い自転車を警笛で蹴散らすようにして車が走り、ところによってはかなりの渋滞をおこしている。住宅建設の方は空からみると壮観でした。ちょうど一九六〇年代の日本の住宅公団による団地建設、それを何倍にもしたものという感じです。

活気はすばらしい。ただ、日本の都市の高度成長はその活気の中に、子供たちの古くからの遊び場や自然とのふれあい、それに自転車というかけがえのない生活手段を失っていったわけです。中国の人たちはどうやら、当時の日本人のわれわれと同様、それらの問題そのものにまだ気づいていない。だから、時期を失しないうちに気づいて対策を講じないと大変なことになる、とやきもきしました。

大連市では都市計画についてくわしい話を聞くことができたけど、そこでもせっかく作った衛星都市構想が中核大都市のスプロールによってダメになってしまわない歯止めをどうするか。むずかしい問題だなと感じました。

経済管理の改革の中味は？

◈これは北京で国家経済委員会の人から説明された話だけど、工業の方の改革のポイントは、企業と行政をはっきり分離して、企業は主管部門の従属物だという観念を打破する、というところにある。「企業に活性がなければ活気にみちた経済体制づくりも不可能」とはっきりいってました。それでこれまで集団所有制企業や国有でも小企業について自主権拡大の実験を試みたうえで、ちようどこれから国有大企業についても踏みきろうとしている。



ある農村の目抜き通り

ただそのためには、合理的な企業会計のもとで経営責任が明らかとなるように抜本的な価格改革が必要だ。そしてまたそれに関連して賃金改革も必要だというところのようです。

すでに七八年から八四年にかけて計画管理の面では、工業製品の指令的生産は一二三種から六〇種へ、統一調達分配品は二五六種から六五種へ減った。調節の手段としても行政的手段によるようになった。そして利潤の全額上納から三〇％企業内留保、七〇％を利潤税として上納へと変った。

これからの展望としては、国有大中企業をいっそう活性化し、「自らの損益の責任を負う生産者となること」をめざしている。そして価格体系を合理的に改め、社会主義市場体系をつくり出してゆく。そして現在企業ごとに定められている調節税を廃止へもっていく。また個人所得税の導入も考えている、など。

とにかく、国家の指導にもとづいて統一的な市場をつくり、その管理を強化してはじめて競争のメカニズムをつくれるという。このような考えから社会主義を、「公有制にもとづく計画的商品経済」と規定しなおそうとしているわけです。

変化の少ない国営大工場＝生産財生産部門

それで、工場の中にはどんな変化が起っているのですか？

大連の機関車工場、貝殻細工工場、それに瀋陽の変圧器工場、デパート、広州の中外合弁自転車工場と、タイプの違った工場、企業をいろいろ見せてもらいました。

ただ、国営大工場はまだほとんど指令性計画のもとにあって、まだおっとり構えている感じ。

たとえば、大連の機関車工場は、一万人強の労働者をかかえる大企業（前身は満鉄）だが、企業自主権といっても製品が製品だけに一〇〇％指令性計画下にある。計画を完了すれば余力で自由に生産してもいいことにはなってるようだけれども。資材の方も一〇〇％保証されているそうだ。製品価格は国の鉄道部の方から年を追って低下を要求され、コストダウンをやって対応するしかない、とのこと。

旧満鉄とはいっても、以前は修理だけしかできなかったのに、一九五四年にはじめて自力で機関車を製造し六四年には二〇〇〇馬力のジーゼル機関車、さらに七四年には四〇〇〇馬力のジーゼル機関車がつくれるようになったと、労働者上がりとみられる企業長が誇らしげに技術の発展を語ってくれました。

労働者の平均年令は三七・五才、勤続一八年前後。女性も旋盤工など多く入っている。

賃金は八級賃金制の基本給（最高一〇五元最低三五元）に平均一七元の奨励給がつく。

一元は七〇円くらいだからとてもつましい。郷鎮企業の労働者とくらべてもそうだ。賃金格付けのアップは筆記試験とじっさいの技能の判断によっておこなわれる。そのため車間（職場のこと）ごとに賃金格付委があるが、エンジニア、職場責任者、工会（労働組合）代表が参加する。奨励給は、仕事の実績にもとづくのやら指標をきめておいて達成度にもとづいて支給するのやら、いろいろ種類があろようだけど、基本給に比べて大きくはない。国有企業の賃金改革はこれからだが、改革の結果はたしてどうなるのか。

これにひきかえ、貝殻細工工場は六〇〇人規模、労働者出資の集団所有制工場。当初五〇人ぐらいの規模で、一人五〇〇～一〇〇〇元の出資だったが、いまは最低一〇元で、多く出したければ多く出していい。ただ、新しく働く人は必ずしも一〇元出さなくともいいということで、株主労働者と非株主労働者がいる。

ここでは、班ごとの出来高制がとられ奨励給のウエイトが高い。基本給の最低は二級の三六・二元、最高は八級の一三二元、これに奨励給＋残業手当で月一七〇元もらう人もいる。

企業長は選挙制、労働者代表大会は昨年七、八回開いた。

不十分な労働者による自主管理

前　衛

それはそうと、企業管理への労働者のかかわりはどうなっていますか。

◈企業長の選挙制など民主的管理の方向は現体制になってからいちおう掲げられて模索されている。でも、まだ全体的にみると経済管理の改革の中で中心に座っているとはとてもいえないようです。

北京で総工会の人から聞いたところでは、従業員大会と労働組合大会とがダブっているケースが多いようだ。しかし従業員大会は、福祉については決定権、職場規則などについては否認権を持っているが、重要な営業政策については審議権にとどまる。企業の指導者の監督と批評をつうじて間接的に影響をおよぼすことになる。また昇給昇格や人員配置や労働者の職場生活に直接かかわる諸問題についての労働組合の規制力は、まだ必ずしも強いとはいえないように感じた。それにもう一つ、いま雨後の筍のように各地に現われてきている郷鎮企業、ここの労働者たちは未組織なのです。

労働者が企業の中でも、タテマエだけでなく実質的に主人公となるには、これから大変な過程が必要だということでしょう。しかし市場メカニズムの荒波にさらして企業を活性化しようといういまの経済改革路線の下ではテクノクラートがともすると効率だけを重視して走り出す別の偏向の危険が予想されます。その意味で、これからも職場の人間関係を一歩一歩変革しつづけていくために、労働者の下からコントロールする力を育てることに、もっともっと関心と力をむけてほしいものです。

私の考えでは、企業の本当の活性化は、労働者自主管理の進展と手をたずさえて、はじめてうまくすすめうるのだと思います。

深圳経済特区にかける中国指導部の期待

さいごに、深圳経済特区とはどんなところでした？

◈いや、おどろくことの多いところでした。

本土とはまるで様式のちがう二〇階近い住宅やビル。外資系企業の看板、街路の活気、香港ドルの流通……。

つぎつぎ驚いているうちに、中国政府がこの深圳を経済改革の先行実験場として、全国各省からノウハウ吸収の意味もこめて人材を送りこませていることがわかりました。

開放体制の象徴が深圳で、「特区人」とか「特区冒険者」とか、その深圳での新しい実験につきすすむ人物像がテレビにもスターとして登場していた。

瀋陽万元戸の家

深圳はたんに輸出加工区というのではなく技術移転の中継地として活用しよう、香港、さらには台湾の統一にも役立てようという遠大な構想のもとに開発されている。基本建設は別として、外資を主とする投下資本はすでに三〇億ドルに達しているという。ただ、進出してきている外資には、まだ中国側の望んでいるような業種のものは必ずしも多くない。それに、製品の輸出比率が上がっていないのも悩みの種。しかし他方では、たしかに採算工期などを考えた深圳ペースといった仕事のスタイルが生まれてきているのも事実。

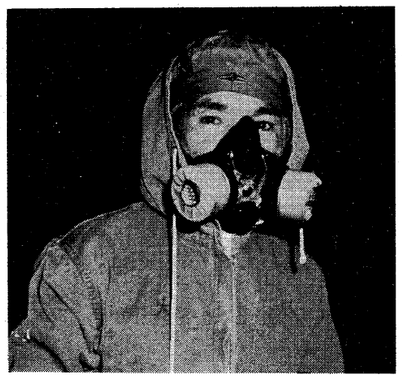
ともあれ、「公有制にもとづく計画的商品経済」がはたしてどういう実質をもつようになるのか、われわれも独自の理論的検討をしながら、注意深く見守っていく必要があるでしょう。

今日はどうもありがとうございました。

東京高裁ではじまる東海第2原発阻止訴訟

本年六月二十五日に水戸地裁で、一二年間におよぶ「東海第2原発訴訟」の判決が出された。判決主文はわずか三〇秒、「原告の訴えを棄却する。訴訟費用は原告の負担とする」というものであった。

新聞等で報道された判決要旨は、きわめてひどいものであった。しかしこの要旨は、報道陣の要望で三千字以内にまとめられたものであり、判決全文については、いくつか注目すべき点もあるという。つまりこの裁判上の争点は、設置許可処分における規制法にかかわる部分についてのみ判断されるのであり、裁判所は「基本設計・詳細設計・運転・稼動後」と問題を分割し、基本設計部分についてのみの判決を下したのである。したがって、それ以後の問題については、判断基準からはずしたのである。



だがこのはずした部分に、じつは重要な問題があり、また裁判所側も、その重要な問題については原告側の主張を認めざるをえなくなっているのである。

第一に核燃料サイクルについては、将来の廃棄物、使用済燃料および廃炉処理等について――原子炉の設置と密接な関係を有し、「全体についての安全性を総合的に審査し規制することも、傾聴に値する考え方である」としている。

第二に原子炉緊急停止案の欠陥として、ATWSを安全性検討の対象とすべきこと、そして最近ではスクランブル（緊急停止装置）の作動の失敗する確率が以前よりもはるかに大きくなっていることを認めている。しかしこの点に関しては、この東海2号炉審査当時は議論にもなっていなかったので、いまからさかのぼることはできないとする。

第三に、TMI（スリーマイル島）事故について、福島地裁・高松高裁判決では人為ミス論でかたずけられていたが、「設置許可段階における技術的能力の審査は、原告らの指摘するとおり、はなはだ概括的なものであり、TMI2号炉において顕在化したような運転管理上の諸問題を逐一検討したものではないから右のような審査のみでは運転管理上の技術的能力に係る総ての問題を解決することは期待しえないことが明らかというべきである。そして、このような概括的審査で足りるとすることについてはTMI事故の発生に鑑みて議論の余地があるものとおもわれる。」としている。

このように判決の中には、いくつか注目すべき点がのべられている。

原告団はこの判決が結論的にはひどいものであるということを確認しながらも、この一二年間の原告団や証言にたった人々の緻密な論証によって、判決文の中にさえさまざまな点で「論議の余地」を残させ社会的に大きな問題をなげかけえたことへの自信を深めたようである。

この「東海第2原発訴訟」の第二幕は東京高裁にうつされた。

電力の最大消費地である東京では、はじめての原発訴訟である。

一二年間というのは短い月日ではない。原子力産業と密接にかかわる日立製作所が最大企業として存在する茨城県のなかで、とくに原子力施設や日立で働く人々が人口の三分の二を占める東海村で、表面だった支援も得られないままこの一二年間をがんばってきた東海第2原発阻止訴訟原告団の住民たちは、東京高裁へと場をうつしながらも意気けんこうである。

判決の日には、吉幾三の「オラ東京さ行ぐだ」の替え唄を歌い、ほがらかに東海反原発の第二幕へ入っていった。

「原発ある　再処理ある　プルトニューム も走ってる　事故もある　ゴミもある
お巡り毎日グールグル　朝起きて　空あおぐ　一時間チョッとの避難道　安全ない
逃げ道ない　住民裁判一二年
〝おらこんな判決いやだ〟〟
東京さでっぺ　東京さ出たなら　銭コをためて　東京で高裁買うべー」

十月十日には、「東海原発・再処理工場反対運動と連帯する連絡会」の呼びかけで、「東海村を写して歩いてみる会」がおこなわれた。東京からのまだ一度も原発を見たことがないという人もふくめて東海の実状を知ってもらおうというこの企画も成功裡に終り、こんどは東京での裁判を支える体制づくりがすすんでいる。

体制づくりのための第一は、なんといっても資金である。原告団がプールした資金だけでは控訴審をまかなうには若干不足で、また東京でも、独自に支える体制が必要になってきた。そのために「東海原発裁判を支える会」が結成され、高裁での闘いの準備をすすめている。東京在住者は電力を消費するだけでなく、こうした問題への積極的なとりくみを求められている。

「東海原発裁判を支える会」連絡先
東京都港区新橋6―11―3　プルトニウム研究会気付　☎〇三―四三六―一四八八

映画がテレビの延長になってしまったいま、生の熱気が伝わる〝演劇が面白い〟―地人会公演「教員室」―

テレビで映画が放映されるようになって以来、映画館まで足を運ぶことがめっきり少なくなった。場末の映画館で三本建て映画を楽しみ、颯爽とした主人公に隣の観客とともに拍手を送ったのも今は昔、映画はなんとなくテレビの延長のようになってしまった。

そんななかで、この頃楽しみはじめたのが演劇の鑑賞だ。演技する俳優の熱気や息吹きが、舞台から客席にじかに伝わってくる。知らず知らずのうちに、俳優たちのセリフの世界にひきこまれる感覚は、かつての映画で味わったものに似かよっている。

地人会第一四回公演、山田太一作、木村光一演出による「教員室」（前進座劇場ほか）は最近見た演劇の一つで、なかなか面白かった。これは少し以前に山田作品としてNHKテレビで放映されたものを、新たに舞台用の脚本になおしたもので、テレビでみた人もいるだろう。

内容は、どちらかというとストーリー性が少なく、ある一日の教員室を舞台とし、教育問題に正面から取りくんだものである。

日常的な中学校での生活がくりひろげられている。そんなとき、教師歴の浅い二年社会担当の教員が、授業をぬけだした生徒たちをなぐってしまう。かれらはいわゆる〝問題生徒〟で、校舎の影でタバコの匂いをぷんぷんさせていた。そしてそのなぐられた首謀格の生徒が、仕返しに教員室を襲い血の海にしてやる、というのだ。

教員室は急拠校長、教頭をふくめて一五人の教師の対策会議の場となる。

生徒たちが襲ってきたらどうするか。生活指導の二年体育担当教員、三年体育担当教員は力には力と主張し、バットやシナイをもつ。三年の数学担当、二年の社会科担当教員は説得を主張する。

この学校では二年ほどまえから、教師は暴力をふるわない、警官は導入しないことを原則に、荒れる生徒に対処することを基本原則としてきた。その原則が決まってから赴任してきた校長は、この方針を受け入れてはきたが。内心では権威による管理が必要だと思っている。そうした気持が若い新任教員を一番問題の多いクラスの担任にし、体育教師らがそうした気配を背景に、力による規律、ナグルことによる指導をこの教員に吹きこんだ……といった要素が、ドラマの進展の中ではっきりしてくる。

これにたいし非暴力、説得による指導を説く理想派教師にも問題はある。たてまえではこれに同調しながら、暴力的な生徒へのおそれと不信をもつ教員、かつてみずからがいじめっ子だったことを告白しながら、その経験で生徒の心理を理解できるという教員、管理主義の傾向を告発するに急な教員など、それぞれがバラバラだ。

しかも多数はどっちつかずである。

保育所に預けた子供の迎えが気になる若い女性音楽教員、夫の寝たきりの母が気になる中年女性英語教員等々、それぞれの生活事情が出される。

緊張に耐えきれずヒステリー症状をおこしストレスを暴力的に発散する気の弱い二年理科教員、「中学校の教員にどんな責任があるのだ。教師にならなければよかった」とわめくこの教師を送り出しながら、三人が退場する。

まあまあと調停してまわる教頭にたいし、出世主義者だと体育教員があてこする。

そして、ついに生徒たちが投石をはじめた。どうするのか、意見はまとまらない。

校長はさけぶ。「自分にも教育への情熱はあるのだ。とにかく外へ出よう」と。

校長、体育教員たちはシナイ、バットをもって、理想派は素手で、夜のとばりがおりた校庭へと、教師たちはふみ出していく。生徒たちの名を呼びながら。

この教師たちの姿に軸をすえた教育劇は、教師の教育への姿勢を通して〝教育問題〟を鋭くえぐりだす。

すでに小学生時代から学力の差を大きくもって進学してきた生徒にたいし、「どう教えたらいいんだ」という一年数学教員の悲鳴は、そのまま子をもつ親の悩みでもある。「ゆっくりと、わかるように教えてくれれば……」という願いはこだまし、〝塾〟がこの遅れをとりもどす場として、わずかに可能性をもっているのが現状だ。

いろいろな子供の個性は、何人もの子供をもてばいやでもわかるのに、学校での画一的な教育方法のまえには障碍でしかない。

では親は、家庭は何もできないのか。

こうした問題が複雑にからんでいるのが、観客席からひろがる日常の世界だ。そしてそんな閉塞状況のなかで、このドラマは、とにかくまえにそれぞれがすすもう、という教師たちの姿勢を示すことで終わる。

こんな状況にあるのは、なにも教師たちだけではないだろう。労働運動をめぐる環境もしかり。学生たちをとりまく環境にも共通する。明るい未来にむけ、すっきりとした解決策があって、勢ぞろいして組織的にとりくむような情勢ではない。

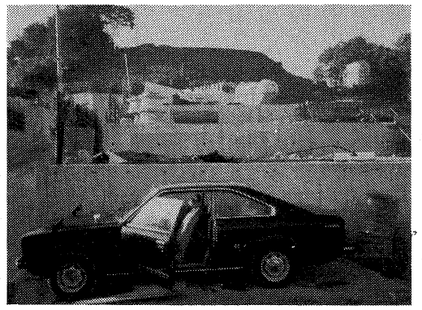
だが、とにかくそれぞれの姿勢を問いなおし、それぞれがたがいの関係をもちながら、現実にたちむかおうというこの問題提起は、演劇による表現をとりながらも、迫力のあるものであった。

（H）

ログハウス中谷津

かやの　けん

十一月三日の夕刻、三里塚の共有者の家でログハウスのお披露目―っ。収穫祭もかねてね。現地の青行、非会員もふくめて約百人が出発を祝った。初めて現地へ来た人、中高生もいた。バーベキューに舌づつみをうちビールをやりながら、ログハウス責任者たちの報告、詩の輪読、歌に続き後半は「荒川スペシャル」(バンド)の登場でおおいに盛り上がりましたぜ。翌日は、早朝より丸太搬入、工房(旧称仮小屋)の基礎工事を開始。悪戦苦闘の一年半をへて、つっ、ついにログは文字通りの着工だーい。



基礎工事もここまで進んだ

オレタチにもできるんだ

谷間の杉林に水車もどきのヤグラあり。中にいるのはモルモットならぬログ人たち。このヤグラの中に約二〇センチの塩ビ管が三〇センチほど突き出ている。知らん人が来てもまさかこれが上総掘りの井戸には見えないだろうな。耕作舎のOくんの監督で、竹と木と水と鉄と人力だけを頼りに五〇メートルも掘ったんだぜ。作業中に岩盤に突き当って手に血豆をつくり、ヤグラのヒモが切れたので修繕したり、穴を拡げようとして入れた道具が引っかかって出なくなったりしたので、そりゃあもう大へんな労働をしたのですぞ。道具類も鍛治ってしまったのにはオドロキ。Tくんの作ったふいごが大活躍。暗くなった中谷津に響いていていた大ハンマーの音が忘れられない。いろんな人がそれぞれに力を出し合った成果として、うまい水にありつける。あとはポンプを買って電気を導くだけだ。来年の夏はここで水泳だぜ。

調査旅行も欠かせなかった。長野の穂高、千葉の流山、奥軽井沢の妻恋村、代々木公園の森林祭りのモデルまで見学した。

四日夕方にコンクリートミキサー車が農道でエンコしてしまったので、即席のバケツリレーでコンクリ運び。懐中電灯を頼りに水平を確かめながら、玄関に余りのグリ石をはめこむ芸当も演じて丸太工房の基礎コンクリ打ちを完了。ついでに道路もできました。なにしろ暗かったので、出来が心配だったけど、あとで見たらうまくいってるよーです。ちょっとずつ新しい形ある物が創られてゆく。ユカイツーカイダネ。

生まれてるかな対抗ブンカ

昨年の四月号にややエラソーな文を書いた。読み返すと恥ずかしい部分や基本の発想にもう一味つけてもいいとこがある。恥の部分は「支援」「連帯」「闘争」へのこだわりのチラツキ。ここはハショッテも次の箇所でスキゾしたいね。

「あらかじめ小屋の機能の枠組をつくってそこへ初心者を誘って教育するような新左翼党派的なやり方よりも、この小屋をつくりつかいこなす人びとの絶対自由な発想で、あやしげに千変万化するものにしたい」「三里塚の自然と共生し、そこに根づいて地域住民の文化・社会にどっぷりつかるようにしながら、内側からの革命の根を太らせしめる。」ようするに現地の人々にもきてもらえるような対抗文化・対抗社会の拠点として機能できるようにしたい。

現地の反応はどうかな。オレタチのつきあいは拡がり深まったかな？　テキさんの出方は？　中谷津反対同盟とのつきあいは、うまくいっている。耕作舎の「お八百屋」が平山さんから野菜を運んで売ったりすることもつきあいを濃くするのを助けている。寺内さんにもお世話になりっぱなしだけど、これからを期待できそうだ。井戸掘りでは、相川さんなどにも助けられましたよ。

他の現地人たちとのネットワークはどうかな。作業中に、青行の寺内金一さんの長子大介くんをおぶったオッカアやオヤジさん、平山のじいさんが様子を見に来る。ある人は、じいさんと山芋掘りにいったりする。こーゆう時は中谷津の人々とのつきあいの味をかみしめて舌つづみをうてる。けども、他の現地の人たちとのつきあいはどーかな。オレ個人の感想では、オレタチが集会やデモをはしょってでもログ作業をしているあいだに、他の部落の人々の目は中谷津にむけられるのが多くなったけど、つきあいの刃の先端はかなりとぎすまされてきたとこもある。最近はオレも用地内にはあまり顔を出さなくなった。先日の収穫祭のお祭り広場でワンパックの人たちに会えた。けど、ほんとうに久しぶりーって感じ。集会なども最近はパスしてるよなオレタチは。ここんとこどー思うか。諸君の反応を待ってるぜ。

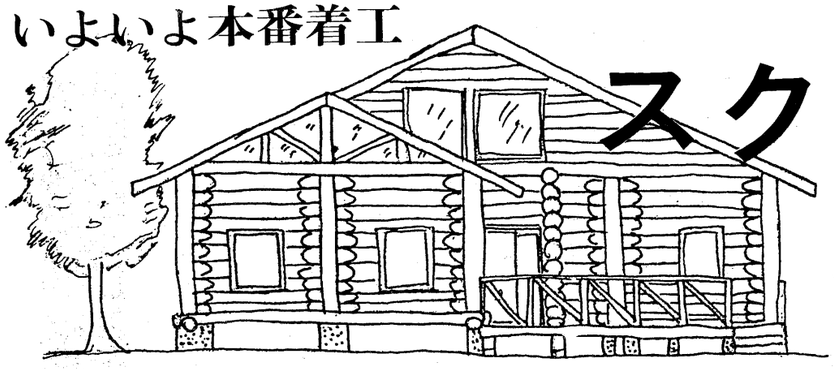
ネットワーキングは今

現地のコドモたちにもログの門を開きたいのだがイマイチだ。なにしろまだコドモが遊べるような空間になってないから。よく来る荒川のコドモたちには、廃材のクギを刺さないだろうか、崖からコケないだろうかと気を配って、ついつい管理者的に振舞ってしまう。でもログができて、庭には遊園地、休みには映画や芝居などのエベントをできるようになれば、きっとコドモたちも寄ってくるはず。

中谷津に集まる男女のオトナたちのつきあいはログだけでなく、米づくり、東峰裁判支援、バンド、八百屋、塾などをつうじて、だんだんオモシロクなってきている。風波土(ふわっと)とゆう新入生も入学してきたし、三多摩の各地からも初体験が出ている。でも収穫祭へのかれらの反応を聞くと考えちゃうな。初めての人にとっては、明るい中谷津も暗く見えるらしい。「あいさつしたのにムッとしてなにも答えない人がいた。」とか「祭りでアイサツするにしては〇〇の誰々と枕詞つけたりするのはひっかかる。」などの意見も出た。三里塚でログの輪を軽いノリで拡げるために気を配ってもいいんじゃないかな。それから現地の文化人たちの反応は、わりとよいみたい。成田の猪風来は井戸掘り道具の鍛治仕事をほめてくれたらしいし、リケットも見物に来たいといっている。他の人たちの反応も追ってハッキリしてくると思う。

権力の方は、もうオレタチをムチャクチャなめきってるんじゃない？　これについては今はノーコメントだ。オレタチはせいぜい気張って最後に笑おうぜ。他の小屋の現闘、青年婦人行動隊の人々、用地内の人々については、先に書いた中谷津周辺の人々の反応しかわからない。今後の問題として残そう。

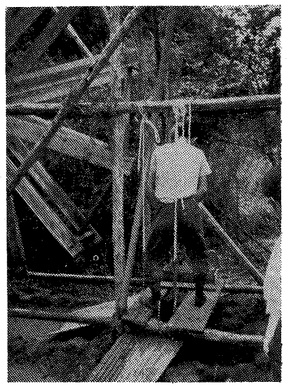
いよいよ本番着工



スクスクイン

ログ作業のエベント性は？

関西から来たダチが「わざわざ金使って土方やりに来たみたいだ。」といったし、奥軽井沢のログハウスを見にいったとき、主人が「完成したときもあまり感動なかったね。建築中もツライことの方が多くて」といっていた。オレタチは少しこれまでツッパッテ、ログ作業をエベントにしようと努力してきた。これからもそうゆう意見は強いだろうし、オレもうまくかみたい。けれど、やはりはやく、正確に、楽しく作ってゆきたいものだ。丸太の皮むきだけで、三〇分から一時間はかかる。



立ションではありません
井戸掘りの最中です

一人の仕事量はせいぜい一日五―六本だろう。労働者が多いから作業は土日だけ。となるといつになったらできるやら。ともかく早期に完成させた方がよいのではないかとゆう気とやはり少々遅れても、中谷津に集まるみなで着実に作っていこうとゆう気が胸の内でグチャグチャになっている。それから電力、風呂トイレ、土台などについてもどこまでオルタナティブ(対抗)技術でやれるか、問題は多い。昨年末のアンケートでは風力発電、コンポスト・トイレ、FM局、縄文土器、手造りミソ工場、映画館、塾、アトリエなど多くの希望が集まったけれど、あまり最初から欲ばるよりも、一つひとつ着実に作っていきたい。読者諸君も、ドシドシチエ、ゼニ、ヒトを集めてほしいな。

寒さもぶっとばして、これから

十二月中旬には丸太工房の棟上げをやります。これはちょっとした祭りだよ。年末には軽井沢までモデルハウス見学に行きついでにログ会議をやる予定。そんでもって、遅くとも来年中には完成させたいもんですね。大広間のいろりで、吊しの鍋を囲みながら、みんなで盛りあがろうぜ。ログはみなのもの。使う人々の勝手な発想で、怪しげに自由に千変万化するたまり神。ともかくいちど、中谷津の現場に来てログを楽しんでくらはい。日誌を読みなおしたり、写真集を見たり、オレタチの話も聞いてほしい。イーハトーブ通信も読んでくれ。もっとこりたい人は、『ウッディライフ』でログハウスの作り方を特集している。その他にもあらゆる角度からオレタチの今に対案をつきつけている資料がある。

十二月中には、東峰裁判一審判決が出るかもしれない。成田用水も辺田、中郷部落で着工らしい。こーゆう時にログハウス。なんてオモロイとりあわせだろうか。オレタチの共同労働は、今までに信じられなかったような宝物を創り出す。これでナンナンダとゆー前に、これをやりたいとゆー気が先走ってログはできてゆく。すべてをコレカラにまかせて。

哲学問答Ⅱ　第六回

アルチュセール再論　その2

理論の応用がおもしろい

Q　この欄もひさしぶりですね。

A　そう、八月号いらいの御無沙汰だ。編集上のつごうもあったが、なにしろいそがしかったものだから。

Q　ところで、きょうはアルチュセール論のつづきですよね。

A　いや、アルチュセール自身については三月号の特集と前回とですんでると思う。ただね、かれの理論を応用して仕事をした人のにはおもしろいのが多い。

Q　たとえば?

A　柄谷行人の夏目漱石論なんかそうだと思う。『マルクス　その可能性』(講談社刊)に収められているが。

Q　どんなふうにおもしろいんですか。

A　漱石にかんする論文が二つならんでる。一年ほどあいだをおいて書かれたものがね。

はじめの方のは、ごくありきたりの「左翼の評論」だ。商品経済がどうの、階級がどうのという。ところが二番目のはちょっとちがう。「英文学」という怪物を相手に悪戦苦闘する一人の日本人としての漱石が分析されている。

Q　なるほどね、江戸時代の生まれのかれにとって、英文学を研究するといっても、雲をつかむような話だろうから。

A　われわれなら大量に翻訳されたイギリスの小説をたやすく利用できる。たいていの人は小さいころから二、三冊くらいは読んだ経験ももっている。イギリスの文化や社会にたいする予備知識もあるていどはある。いま日本で「パン」といえばイギリスパンのことだしね。それをたいがいは、米のメシよりも多く食ってるくらいだ。

Q　漱石がめんくらったのもあたりまえだ。

A　いちばん困ったのは、英文学を理解するための受け皿が漱石自身にないことだった。それで「漢文学」という概念を漱石はもちだした。と、まあ柄谷はこういうんだ。

Q　漢文学なんてあるのかな。

A　柄谷もいってる。「そんなものは存在しない」って。(笑)

存在しないんだけれど、巨大な英文学の**体系**というか**構造**に立向うとき、なにか自分も背後に持ってると思ってないと、不安でしようがないんだろうという。

Q　おもしろいね。一つの構造を前にすると、ないはずの別な構造が浮かび上ってくるなんて。

でも、なぜ近代以前の日本文学を対置しようとしなかったんだろう。

A　源氏物語や西鶴じゃ心もとないと思ったんじゃないのかな。論理的な構造をもたないのが特徴だから。その点、漢詩とか漢籍の方が頼りになると思ったんだろう。

Q　一種の西欧や近代へのコンプレックスなのかしら。

A　それもあるかもしれない。ただね、厳然と存在する英文学に存在しない「漢文学」を対置する漱石の姿をとおして、明治期の日本の知識人と「日本というもの」の「構造」がハッキリ浮き出てくるだろう?

Q　そうね、構造ともいえないグズグズの「構造」がね。

A　そう、それが日本であり日本人なんだ。(笑)

Q　そうした方法がアルチュセール的だというんですか。

A　かれは初期マルクスと後期マルクスのあいだに「切断」を置き、両者の構造のちがいの比較をとおしてマルクスの思想形成過程における「飛躍」の存在を明らかにしてみせた。それに似てると思う。

レヴィ=ストロースの構造主義のばあいたとえばアメリカインディアンのいくつかの部族の神話の比較をとおして、そのすべてに共通する一つの隠された論理を発見するというやつだ。ところがアルチュセールのほうは、それぞれのパラダイム(枠組)のちがいを明示するという方法になる。

Q　前号の座談会での深川発言もそれに近いのかな。支配階級のネットワークとこちらの対抗的ネットワークの構造の対比をとおして「政治」のちがいを浮き出させるという……。

A　そう思うよ。

Q　司馬遼太郎の信長論も似てますね、『国盗り物語』に出てくる。それまでの信長像といえばただの**気まぐれな暴君**にすぎなかった。それが司馬遼の手にかかると中世の秩序をブチこわし、近世を切り拓く歴史的役割をになう人物として描かれる。

A　まさに「パラダイム転換」をなしとげた人物としてね。

Q　けれど司馬遼自身は、自分の方法をそうは自覚していない。

A　ビルの上から下を歩いてる人を見下すと、歩いてる本人よりその人のことがよくわかるとか、どんな英雄や賢者も知りえないかれらの運命を、後世のわれわれは知ることができるとか表現してる。

Q　ところで、左翼の中にはかれを毛嫌いする人も多いですね。

A　「司馬遼史観」とか勝手にデッチあげておいてね、それで「唯物史観に敵対するものだ」とか息まいている。(笑)

Q　そういう人は、一度自分の構造をじっくり分析してみるといい。(笑)

表紙のことば

絵画の事実性(アクチュアリティ)が問われる場合、まず、絵画がドキュメントであるかどうかの問が先行する。

事実のプロパガンダや近代美学の自家撞着からはなれ、「絵画はドキュメントである」というテーゼをもって、そこから逆算して、絵画の始源を尋ねれば、絵画のはじまりが拡大された生活の記録であることが、容易に判明する。

「射影」や「模倣」のコンセプト(概念)の機能的な転換こそ、絵画の事実性だといえる。

1985年11月15日発行　第３種郵便物認可

編集　『前衛』編集委員会
発行人　高橋一雄
発行所　現代企画　☎03－293－8564
東京都千代田区神田神保町１－64
神保町ビル203号　振替東京5-44589
購読料　2800円（年間〒共）
4400円（密封･年間）
定　価　200円